

幸福に暮らした二人

小川未明

青空文庫

南洋のあまり世界の人たちには知られていない島に住んでい
 る二人の土人が、難船から救われて、ある港に着いたときであ
 りました。

砂の上に、二人の土人がうずくまつてあたりの景色に見とれて
 いました。その港はかなり開けたにぎやかな港でありましたから、
 華やかなふうをしたいろいろな人が歩いていました。またりっぱ
 な建物も見られました。そして、あちらには、煙突から黒い
 煙が上がって、その煙は雲切れのした大空を沖の方へとなびい
 ていました。

それから目に見るもの、また、耳に聞くもの、一つとしてこの

ふたり 二人の黒んぼの心を驚かさないものはなかつたのです。二人はあ
ちらに見える、白く塗った三階建ての家屋を見ましたときに、そ
れがなんであるかすらもよくわからなかつたのでした。しかし、
自分たちと異つた人間がそばの家々から顔を出してのぞいた
り、またその中に動いたりしているようすなどを見ると、あちら
の美しい建物の中には、もつと力の強い、偉い人間が住んで
いるのだらうということ想像しました。それにつけても、こ
んな美しい街がどうしてできたものか、まただれによつて、どう
して美しく地上にいろいろなものが造られたのであるか、それ
を考へることすらが、二人にはできなかつたのであります。

太陽の光は、故郷の土の上に照りつけるほど強烈では

なかつた。そして、それだけ夢を見ているような、うつとりした
 気持ちきもちにさせたのであります。二人はあの怖ろしいあらしの夜を
 怒濤どとうにもまれて、真つ暗くらな中を漂ただよっていたこと、また、夜が明あけ
 ると、青いあお、青いあお、はてしもない海の上を、幾日いくにちも、幾日いくにちも
 漂ただよっていたこと、そしてそのあげくに、見みも知しりもしない船ふねに救すく
 われたこと、そして、いま、このどことも知しらない港みなとについて、
 陸りくに上あがって砂原すなはらにうづくまつって、日ひの光ひかりを浴あびているという
 ことすら、このときは頭あたまの中なかに思おもい出ださずに、ただ、うつとりと
 あたりの景色けしきに見みとれていたのであります。
 あたりを往來おうらいする人々ひとびとは、この二人ふたりのいるそばに近寄ちかよつて、
 珍めづらしそうにながめて、笑わらつてすぐにゆくものもあれば、また、し

ばらくは立ち止まってゆくものもありました。

人間だということだけは同じであるが、色も、姿もなにひと

つ同じものはなく、そして、言葉すらまったたく通じなかつたので、

たがいに顔を見合わしながら、心のうちでは不思議なものを見る

ものだというくらいに思つたのであります。

二人の黒んぼは、極度に自分らの身のまわりに集まつてくる

人たちをおそれていました。こんなにりっぱな街を造ることので

きる人々だから、どんなに力があるであろう。また、どんなこ

とでもなし得ないことはなからうから、自分たち二人の命は、ま

ったくこの人たちに自由になされるものだというように思つたか

らであります。

ふたり
二人の黒んぼを見た、みなと ひとびと くち
港の人々は口にこそ出していわなかつ
たが、

「なんとという怖ろしい顔つきをしている野蛮人であろう。人
間を食うというのは、この種族ではなからうか！」と、心
思ったのでありました。

南方の太陽に近い下の野原では、やしの木は、もつと元氣
よく、もつと葉が濃く、丈が高くしげっていました。二人はこの
港の郊外にも、やしの木が、ところどころに影が黒く、日に照
らされて立っているのを見たのであります。

この木の影を見たときに、二人は、どんなになつかしく思つた
でありましょう。

「やはり夢ではなかった。また死んでいってからの極楽でもなかった。やはりこの世の中の景色なんだ。」

こう思つて安心すると同時に、ここからは遠く隔たつている、故郷のことを思い出さずにはいられませんでした。このとき、ある日、海に出て、あらしのためにさらわれた記憶が蘇つたのでありました。

「自分の故郷はどちらだろう……。」

ふたり、二人の黒んぼは、いい合合わせたように、左を見たり、右を見たりして、涙ぐみました。

日の光がかげつて、天気が変わりそうになつたので、そばに立っている人々は、しだいに少なく、みんなあちらにいつてしま

いました。

ちようどこのとき、一人のおじいさんがつえをついて、前を通りかかりましたが、懐から財布を出して、一つの銀貨を二人のうずくまっている前に投げ出して立ち去りました。

ぴかぴか光る銀貨は、砂の上に落ちて光っていました。二人の故郷では銭というようなものがなかったから、それがなんであるかわかりませんでしたけれど、ただ、その美しい光に魅せられて、二人のうちの年とつたほうが、真っ黒な毛の生えた、つめの伸びた黒い手でふいに、小鳥をつかむときのようすばしこく銀貨を握ってしまいました。

二人のものに、ものを恵んでくれたものは、このおじいさん一

とり人だけでした。それほど、あまり姿が違つていたので、この街のひとびと人々には、かわいそうというほどの同情の念が起こらなかつたのであります。

ふたり二人は、幾日めかで陸に上がつて、はじめて砂の上にならずに連つたのであつたが、まもなく、船の人がきて、二人は、あちらがめただけでありました。そして、ふたたびこの港から離れてしまつて、航海がつづけられたのであります。船は、南へ、南へとゆきました。

ふたりこの二人は、村にいますときから仲がよくて、ちようど兄弟のように思われたのであります。ひとたび難船をして、もう

助たすからないものと思おもつたのが、救すくわれましてからは、二人ふたりの仲なかは、
 いつそう親密しんみつになりました。船ふねの中なかでも、二人ふたりは、おじいさん
 からもらつた銀貨ぎんかを出だして、かわるがわるそれを掌ての上うえにのせて
 は、額ひいたを合あわせてのぞきながら、
 「これは、二人ふたりの仲間なかまのものだ。」といつていました。銀貨ぎんかには
 偉えらそうな人間にんげんの顔かおが描えがかれていました。二人ふたりは、それが貨幣かへいで
 あつて、それと同じおなものが、数かずえることのできないほどたくさん
 にあつて、世界せかいの文明ぶんめいがゆきわたつてゐる国々くにぐにに流りゆう通つうし
 ているということなどは知しりませんでした。だから、「なんにす
 るのだらう？」と思おもつてしまいました。もとより言葉ことばも通つうじませ
 んから、船ふねの人々ひとびとと話はなしをするというようなこともありませんで

した。

「偉い人が、これを胸につけるのだろう。」と、年上の甲のほうがいいました。

「それにちがいない。」と、年下の乙はうなずきました。

「あのおじいさんは、白いひげをはやしていたが、きつと偉い人間なのだろう。」と、甲はいいました。

「きつと、あの人が、あの島の頭かもしれない。それで、よく難船をしても助かったというので、これをくれたのかもしれない。」と、乙は答えました。

二人は、それを持って故郷に帰れるのを、真に心の中で誇りながら、幸福に感じていました。それから、いろいろのことが

ありましたけれど、とにかく、ついに二人は、無事に故郷の島に着くことができたのであります。

この島の強い、幾人かの頭というようなものは、みんな二人よりは年上であります。そして、強いものほど、頭蓋骨をたくさん家の中に並べていました。その頭蓋骨はどうしたのかといいますが、たがいに武力を争わなければならなかったり、また、口では話がかずに、力できめなければならなかったときに、戦って倒した相手の頭でありました。だから、それをたくさん持つているものほど、村の人々に尊敬せられ、恐れられたりしていたのであります。

二人のものが、自分らの部落に帰りましたときに、みんなは、

どんなにびつくりしたでありましょう。もう難船なんせんをして死しんだものと思おもつていました。そして、もうそのときから、日数ひかずもよほどたつていましたので、帰かえつてこないものとあきらめていました。二人ふたりの生いきて帰かえつてきたことは、彼らかれにとっては信しんじられない奇き蹟せきでありました。

「おまえがたは幽霊ゆうれいじゃないか？」といつて、黒んぼくろぼの仲間なかまは、二人ふたりのものを取とり囲かこみました。二人ふたりのようすは、島しまを出でるときとは、まったく違ちがつていました。手てや、足あしや、顔かおの毛けはいっそう深ふかくなつて、そして、見違みちがえるほどにやつれていたので、

「なにが幽霊ゆうれいなものか、俺おれたちはみんなおまえがたの顔かおを覚おぼえている。」と、二人ふたりはいつて、だれかれの名なをいつては、なつか

しぎのあまり抱きつきました。

すると、みんなは、どうして助かったか？ どうして帰つてきたか？ といつて、口々にたずねました。二人は、難船したときの模様や、暗かった夜のものすごい光景や、救われてから港に着いて、陸に上がつて、それはそれはいいつくされない美しい、不思議な世界を見てきたようなことを話しました。そして年上の甲は、

「その国の王さまが、二人に、このぴかぴか光るものをくださつたのだ。これさえ持つていればどこへでもゆけるありがたいものだといつてくだされたのだ。」といつて、銀貨をみんなに示しました。

「ここに書いてある怖ろしい人が、その王さまなのだ。」

太陽の光はまぶしく、銀貨の面に反射しました。みんなは、この光をおそれるように後退りをしました。そして、目をみはりました。

「えらいものを持ってきたものだ。俺たちは、まだこんな光るものを見たことがない。」

みんなは、手に手に、武器を持っていました。それは、竹槍や、たまたま海岸に打ち上げられた難破船に着的ている、鉄片で造られた剣のようなものでありました。しかし、彼らはまだ、こんなにぴかぴか光る金属を見たことがなかったのであります。

そのとき、いちばん狡猾こうかつな、悪智恵わるぢえのある年としとった男おとこだけは、みんなが手てにとつて不思議ふしぎそうにながめている銀貨ぎんかに、自分一人じぶんひとりは手てを触ふれようとせすに、すこし隔へだたつたところから、みんなのようすを嘲あざわら笑わらつた目めでにらんでいました。

「あのぴかぴか光ひかるものは、いつか俺おれのものになるんだ。ばかものめ。」と、その目めつきはいつているのでした。

この不思議ふしぎな光ひかるものが、部落ぶらくに入はいつてきてからは、みんなにもそれが欲ほしいという欲望よくぼうが起おこりました。

「人間にんげんの頭蓋骨ずがいこつよりか、あのぴかぴか光ひかるものに描えがいてある頭あたまのほうがいい。あれを胸むねのあたりに下さげていたら、いちばん偉えらい人間にんげんになれるのだ。」という考かんがえを、みんなは頭あたまの中なかにもつ

たのであります。そうして、いままでよりか、みんなに一つ欲望が増したので、いつか、この光る銀貨のために争いが起こらなければならなく思われたのでした。

「ほんとうに、いつこの光る大事な品を盗まれるかしれないから、油断はできないぞ。」と、甲と乙とはいい合つて、二人は、それを大事に守っていました。

二人は、ほかにだれもないときに、銀貨を取り出して見入っていました。すると、遠い、港の街や、空や、丘や、木立の影が、ありありと夢のように、記憶に浮かんでくるのでした。もう、二度とは見られなくなった、遠い、遠い、かなたの国の景色であります。そして、おじいさんがつえをついてきて、二人に、この光

るものを投なげていつた有あり様さまが、なお昨日きのうのように念頭ねんとうに思おもい出だされるのでありました。二人ふたりは、そのことを思おもうと、うつとりとして、心こころは青あおい、青あおい、海うみを越こえてかなたに憧あこがれたのでありま
す。

「これは、命いのちよりも大だい事じなものだぞ。」と、二人ふたりはいい合あつて、おたがいの心こころをいましめました。

部ぶ落らくにはもう一人ひとり強つよい男おとこがありました。その男おとこには、美うつくしい娘むすめがありました。ある日ひのこと、その男おとこは甲かのもとへやつてきまし
た。

「私わたしの娘むすめをおまえにやるから、いつかのぴかぴか光ひかるものを私わたしに
くれないか。」といいました。

甲こうは迷まよいました。その男おとこの娘むすめというのは、評ひょう判ばんの美人びじんであ

つたからであります。そして、すぐには返へん答とうができなかつたの

で考かんえておくことにしました。甲こうは、独ひとりになつて、その娘むすめの姿がた

を目めに思おもい浮うかべました。かわいらしい口くちもと、白しろいきれいな齒は

そして、二つうつくの美めしい目めの光ひかりは、大だい事じにしているあの金きん属ぞくから

放はなつ光ひかりよりも、もつとやさしいうるおいのあるものであります。

甲こうは、もう、その娘むすめを自じ分ぶんのものにされることなら、あの大だい事じな

ものを手て放ばなしてもいいという氣きになりました。そして、そのこと

を乙おつに相そう談だんしました。

すると、乙おつは目めに涙なみだをたたえながら、

「あの暗くらい、怖おそろしい夜よるのことを忘わすれたか？

俺おれたちは、ああし

て助たすかったのだ。そして、あの港みなとに上あがって、ああしてふたたび生きてここに帰かえったのだ。二人は苦勞くろうを一つにしてきたのに、おまえは自分一人の幸福こうふくのために、たいせつな記念きねんを失うしなつていいのか？」といいました。

甲こうは、自分じぶんの考かんえが悪わるかったと悟さとつて、乙おつにわびたのであります。その後ごは、二人ふたりはあいかわらず睦むつまじく、仲なかよく暮くらしていいました。

かの狡こうかつ猾わな悪智恵わるぢえのある男おとこは、部下ぶかをたくさんにもつていました。男おとこは、どうかして、二人ふたりを殺ころして、あの光ひかるものを奪うばい取とろうと思おもいました。その男おとこが、計けい略りやくをめぐらしているということことを、二人ふたりは耳みみにしました。そして、もう一刻こくもここにいるの

が危険きけんになりましたときに、二人は相談そうだんをして、どこか安全あんぜんなところへ逃のがれることにいたしました。

ある夜よ、二人は、ひそかに部落ぶらくから逃のがれ出でました。そして、谷たにをつた、山やまを越こえて、高たからかに波なみの打うち寄よせる海岸かいがんまでやつてきました。

「もうここまでできてしまえば安心あんしんだ。まあ休やすんで、これからゆく先さきのことを考えかんがよう。」と、甲こうはいいました。

「ほんとうに、俺おれたちは、どこへいったら、安心あんしんして楽たのしく暮くらすことができるだろう。」と、乙おつはいいました。

その夜よは、空そらがよく晴はれていました。そして、一面めんに海うみをおおそらうた空そらには星ほしが輝かがややいていました。

砂すなの上うへに横よこになつて、しばらく空そらをながめていました。甲こうは、ふいに体からだを起おこしました。

「俺おれは、あんなに美うつくしい星ほしが毎夜光まいよみかつてゐることを知らなかつた。あの星ほしさえ見みていたら、あの港みなとも、おじいさんも、白しろい家いえも、俺おれたちの乗のつていた船ふねもみんな思おもひ出だせるではないか？」といひました。すると、やはり黙だまつて空そらを仰あおいでいた乙おつはうなうなずずきました。「おまえ、あのぴかぴか光ひかるものはどうした。海うみの中なかへ投なげてしまえ。あれもきつとだれも手てのどきどきはししない空そらに上のぼつて星ほしとなるのだから……。」といひました。

甲こうは銀貨ぎんかを取とり出だして、遠とおく海うみの中なかに投なげてしまいました。

このとき海うみの上うへは、いつそう明あかるくなつたよような気きがしました。

彼^{かれ}らの部^ぶ落^{らく}は、
また昔^{むかし}の平^{へい}穩^{おん}に帰^{かえ}りました。

——一九三三・一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「幸福《こうふく》に暮《く》らした二人
《ふたり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幸福に暮らした二人

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>